氏　　名		董　芸
学 位 の 種 類		博士（美術）
学 位 記 番 号		博美第 22 号
学位授与年月日		令和２年３月２５日
学位授与の要件		学位規則第４条第１項該当者
題目	学位論文題目	社会システム構築におけるデザインモデル ―地域社会に潜む空間とコミュニティの問題をデザインシンキングによって抽出し、課題解決するスケーラブル・デザインプロセス―
	研究作品題目	(1)「SS デザインモデル No.3」プレゼン作品一式 (2)「SS デザインワークショップ　-from insight to emergence-」
論 文 審 査 委 員		主　　査　　教　授　　関口　敦仁 副　　査　　教　授　　中島　聡 副　　査　　教　授　　柴崎　幸次 外　　部　　情報科学芸術大学院大学 審査委員　　教　授　　金山　智子

１　学位論文の要旨

１．はじめに

個別・多様化した価値基準・生活スタイルは様々な社会問題を引き起こし、社会生活そのものを複雑にしている。「産業化経済」から「経験経済」へ変移しつつあると評価されている中、優れた経験を生み出す方法としてデザインシンキングが問題解決に有効とされている。筆者は、デザインシンキングのデザインモデルもしくはそのデザインプロセスの要素を、公共性を持つ空間づくりに適応できるかどうかという問いを持った。デザインシンキングに基づくデザインメソッド、デザインプロセスを用いることで、対象の空間とコミュニティに存在する複数のステークホルダーに対して、潜在的なニーズを抽出し、問題解決につながることを筆者は期待し、本研究に取り組んだ。

２．研究の目的

本論文の研究目的は、公共性をもつ空間づくりに使い手である市民が参画し、協働で地域の環境デザインに取り組むことが一般的になりつつある中で、環境デザインが対象とする空間・コミュニティのスケールと、空間のデザインプロセスの関係性を明らかにし、地域に即した対処法として、対象空間・対象者数のスケールおよび、その関係性の複雑さに柔軟に対応できる、社会システムの構築方法を検討する。本研究では、スケールを、環境デザインが対象とする空間（敷地・延床面積）の大きさおよびコミュニティ（対象圏域の利用者・近隣市民など）の人数およびその多様さと定義する。

３．研究方法と内容

本研究は、環境デザインの問題を対象としているが、環境デザインを構成する『人・モノ・コト』を『コミュニティ・空間・システム』にさらに読み替えて、より具体性のある議論を展開する。まず、空間とコミュニティのステークホルダーが多数存在し、ステークホルダー間の利害関係が多種なほど、問題解決のためのシステムは複雑化する傾向にある

と分析している。そしてこれは公共的な空間となるほど、問題が生じやすいことを意味する。

空間づくり・コミュニティづくりにおける課題の本質を理解し、課題を解決する方法を導き出すために、以下の方法をとることとした。デザインシンキングのデザインモデルおよび、地域ブランド創出に始まるデザインモデルについて比較、考察を行い、SS (Social System) デザインモデル No.00 を構築する。次に、実践的にスケールの異なるケースによる検証を通して修正・改良を図る。最終的に SS デザインモデル No.03 の提案行う。

本研究の新規性は、スケールの異なるケースプロジェクトを選定し、スケールが変化することによって、生じる課題の特性の違いは何か、また解決方法にどんな変化が起きるのかに注視したところにある。そうすることによって、これまでスケールの異なる空間・コミュニティ間で展開できなかったデザインプロセスが、展開可能となり、空間づくり・コミュニティづくりに特化しつつも､汎用性のあるスケーラブルなデザインプロセスとして、様々な地域課題の解決に貢献できると筆者は考える。

本研究を締めくくるに当たって、提案するデザインモデルをもとに取り組んだ空間・コミュニティづくりのケースの結果を踏まえて、①ケースで検証、再構築を経たデザインモデルの提案、②ケースで実施されたデザインプロセス、③ケース 5 によって創出された空間デザインを本研究の成果とし、ビジョンの探索、構造化・共有、課題抽出・スケールの検討、実現方策の提案までのプロセスを表現した作品 (1)「SS デザインモデル No.03」プレゼン作品一式、(2)「SS デザインワークショップ -from insight to emergence-」を制作し研究作品として提出する。

４．論文構成

序論

第 1 章 研究の背景と目的

第 2 章 デザインシンキングとそのデザインモデルに関する考察

第 3 章 地域ブランド創出から始まる地域の環境デザインモデルに関する考察

第 4 章 デザインシンキングと地域ブランド創出デザインモデルから仮定する新デザインモデル

第 5 章 ケース 1.「施設のコミュニケーション誘発空間・コミュニティづくり」

第 6 章 ケース 2.「大学の共有空間・コミュニティづくり」

第 7 章 ケース 3.「市の公園・コミュニティづくり」

第 8 章 ケース 4 (※ケース 4-1).「町のまち・コミュニティづくり」

第 9 章 ケース 5.「大学の活動拠点・コミュニティづくり」および SS デザインモデル No.02 の提案

第 10 章 ケース 6 (※ケース 4-2) .「町の交流施設・コミュニティづくり」

第 11 章 全体考察および SS デザインモデル No.03 の提案

結論

５．今後の課題

本研究の結果として、複数のステークホルダーの潜在的なニーズを抽出することに成功した。各ステークホルダーのそれぞれの潜在的なニーズは、必ずしも同一次元もしくは同一方向のものではないため、デザインモデルの展開プロセスでは、潜在的なニーズの抽出

以上に大きな問題が生じる場合があることが明らかとなった。本研究によりスケーラビリティの観点から、地域の環境デザインの創造性を担保するためには、スケールを意識した上で①対象空間・コミュニティのアクターのそれぞれの特性について的確に把握し、②市民の適切な参加時期・参加方法を配慮した事業のプランニング、推進体制を構築できることが重要であるということが分かった。また、空間づくりが終了した後にも③持続的な戦略を組み立てることを許容できるデザインプロセスの循環が必要不可欠ということが明らかになり、これについては検証結果が不充分であり、空間の運用期間の経過に伴い、引き続き検証および考察が必要である。

２　学位論文審査の要旨

【論文】社会システム構築におけるデザインモデル

―地域社会に潜む空間とコミュニティの問題をデザインシンキングによって抽出し、課題解決するスケーラブル・デザインプロセス―

社会システム構築におけるデザインモデルの提案を前提に空間とコミュニティが提供する「経験」に基づき、地域社会に潜む問題を抽出し、課題解決するアプローチ方法を研究テーマとして進めた。論文の流れは、デザインシンキングの説明から、事例、活用と本テーマでの課題や予定、各スケールによる」コミュニティーケースによる実証実験を通した、システムづくりとその成果から得られた結論へと導かれる構成となって示されている。デザインモデルは仮説として立てられ、ワークショップによる実証実験を経て、精査され、3つのバージョンを提示し、スケーラブルモデルとして成立することを示した。

【作品】(1)「SSデザインモデルNo.3」プレゼン作品一式

(2)「SSデザインワークショップ-from insight to emergence-」

論文内で成果としてあげた「SSデザインモデルNo.3」とその関連作品を示した。また、中間スケールでのモデルケーとして、大学内での共有スペース構築のためのワークショップを通じて発生した課題を取り上げ、それを活用した空間デザイン作品を提示した。(2)の作品は論文内での中間的スケールケースとして、位置付けられ、論文との整合性もあり、実験的結果として参照可能な作品でもある。(1) はデザインプロセスモデルと地域解決型フィールド図をマッチングさせ、本論文の成果としてデザインがなされた。

【口頭発表】

研究テーマの基礎となるデザインシンキングについて、丁寧な説明とそれらをどのようにスケールの違う、コミュニティーケースに適用していくのか、また、それらからスケーラブル・デザインプロセスを導き出していくのかなど、秩序だって発表がなされた。特にデザインモデルとフィールドとの関係や人の役割とデザインプロセスとの関係について、手寧な発表がなされ、仮説からデザインモデルに至る道筋について、理論的に説明がされた。以上のように、董芸はこの論文及び作品において、博士の基準を満たすことを示した。

３最終試験結果の要旨

論文、作品、口頭発表等に基づき、口頭試開等による最終試験を実施した。その結果、新規性が高く、まだ他にない論文テーマながら、長期間にわたる多数のワークショップ実験を行い、その成果をまとめ、モデル化し、仮説との整合性を確認するという繰り返しを行い、論理的な説明をデザインモデルに加えることを結実している。口頭試問では、各ケースにおけるステークホルダの役割などの比較において、その適切性や、結論に至る経緯

の説明を求められ、秩序立てて説明が行われた。複雑な内容の論文を自ら理解し、展開、説明する能力は間違いないものと思われる。

最終試験において、董芸は、論文テーマでもある社会システム構築におけるデザインモデルの提示を進める中で、地域での課題を抽出し、空間とコミュニティの問題を解決するスケーラブルなデザインモデルの提示を行なった。その内容について、そして、結論に至るプロセスの提示内容からも、独自性のある研究であり、まだ、国際的にもまとめられていない対象事例のモデル化研究として評価した。この成績は、博士の学位を与えるに十分であった。